九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Hong Sheng 洪昇's Changshengdian 長生殿 (13)

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9581

出版情報：中国文学論集. 35, pp.73-86, 2006-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『長生殿』訳注（十三）

竹村則行

凡例

一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『暈刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。

二 本訳注に当たり、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。

塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）
徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
曽永義『中国古典戯劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）
岩城秀夫『長生殿』（平凡社東洋文庫、二〇〇四年）

三 本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。

四 **【曲牌名】**に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、**【ゴチック文字】**の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五 訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六　訳文は、**〔ゴチック文字〕**で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となるように留意した。（「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。）それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七　前稿「『長生殿』訳注（一～三、六～十、十二）」は『中国文学論集』二十六～三十四号（九州大学中国文学会、一九九七～二〇〇五年）に訳載し、また、同（四～五、十一）は『文学研究』九十七～八、一〇二輯（九州大学文学部、二〇〇〇～〇一年、〇五年）に訳載した。

八　本訳注（十三）（第四十六～四十七齣）は、二〇〇五年五月～〇六年五月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した院生、聴講した研究生、助手は次の通りである。

大渕　貴之・原田　愛・甲斐　雄一・有木　大輔・陳　狆・
陣内　孝文・中尾健一郎・奥野新太郎・岸田　憲也・彭　腊梅・
長谷川真史・張　瑞・土屋　聡

第四十六齣　覓　魂

（浄が道士に扮し、小生と貼は小道士に扮して旗を持って先導して登場）「臨邛出身の道士で大都長安の旅客となっている私は、鍛えた精神力で亡き人の霊魂を招き寄せることができる。天子が亡き楊貴妃を思いわずらう姿に感動を受けた私は、くまなく念入りに貴妃の霊魂を探し求めさせる。」拙者は道士の楊通幽、仙界に身を置き、仙籍に名を連ねており、風や雷電に乗って、元気を天界に運び、死者の霊魂を招き寄せたり、地下世界に遊行したりできます。私は太上皇（玄宗）が亡き楊貴妃を偲び、その霊魂を招き寄せられる道士を広く探していると聞いたので、詔令に応じてやって参りました。太上皇はたいそうお喜びになり、東華門にて法術を行うよう命じられました。既に法壇はできあがり、今夜この法壇に登って招魂することになっています。小道士ども、私につ

いて壇上に上るように。（小道士が剣と水とを捧げ持ち、ともに行く科）（浄）

【仙呂点絳唇】ただ一途な情のために、死者も生者も満たせぬ怨みを抱く。太上皇は亡き楊貴妃に再び会おうと思っておられるので、私は無限の法力によって、特に神通力を示すことにしよう。（舞台上に高い法壇をしつらえる科。）（小生、貼）法壇でございます。（浄）これは素晴らしい法壇だ。

【混江龍】この法壇は、**本は虚空に建てられ、太極をかたどり、原初の天地に則ったもの。無の中に陰陽の気が群集し、有の中に水火等の五行が分別することなく一体となっている。**（小道士）基壇は何からできておりますか？（浄）基壇ならば、五丁の力士や六甲の火神を使わして**大地にめぐらせ、中央に建立したもの。**（小道士）どんな方法で成ったのですか？（浄）用いた方法とならば、心臓や腎臓の五臓の機能を整え、**春秋の季節や東西の方位に合わせ、呼吸をたちどころに完璧なものにしたのだ。**（小道士）法壇には窓や戸はありますか？（浄）窓や戸といえば、太陽や月に向かって、**南北・東西に開いておる。**（小道士）方角は如何でしょう？（浄）方角ならば、大地に鎮座し、天界に通じ、**天地南北に対応しておる。**（小道士）この法壇の大きさはどれくらいでしょう？（浄）この壇は一隅にあり、基壇もあって**面積は狭いが、**須弥山や宇宙世界を収蔵することができ、**無限の広がりを持つのである。**（小道士）なるほど、何でも広く包括するのですね。（浄）この法壇は、三百六十度の天界を包蔵し、**日月星辰**を納れることができる。（小道士）その支配が及ぶ範囲も広いのでしょうか？（浄）須弥山の四大州、億万もの人間界、それに**山岳河川**といったところだ。（小道士）法壇では誰が号令に従うのですか？（浄）号令に従うのは、迅速に応える**風神・火神・雷神・電神**といったところ。（小道士）誰が使い走りするのですか？（浄）使い走りするのは、誰でもその任でない者はいない。**時の神、日の神、月の神、年の神、**みんなそうだ。（小道士）法壇の周囲はどんな様子ですか？（浄）中空には、にぎやかに**鸞鳥や鳳凰が鳴き、**両側には、次々に**虎や龍が居並んでいる。**まことにこれは、**妄念の無い清浄世界**そのものだ。（小道士）わが師の無限の法力が無ければ、どうしてこんな無上の法壇が建てられたでしょう。（浄）これは全て大唐の**君王の福徳**によるもの、どうして小生ごとき道士の**法力のすごさ**を誇ることがあろうか。（小道士）わが師よ、どうか法壇の上へ。（内で法楽が演奏され、二人の小道士が浄を導いて壇に登る科）（浄）天風に乗り、仙楽に従い、二つの**鸞鳥の旗に導かれて法壇に上り、高く北斗星を拝する。**（内で鐘や鼓を鳴らす科）（浄）鐘

や太鼓の音が鳴り響く中、私は**恭しく象牙の笏を捧げ、遥かに上天を拝する。**（小道士が香を差し出す科）どうかわが師にはご焼香をお願いします。（浄が香をつまむ科）この香には、かの西天竺の栴檀林にある青獅窟で採れる**鳳凰のように根が這った名栴檀**や、東海の彼方ペルシア産の**蚕や蝉形の名龍脳**も及ばないほどだ。この香は、めでたい雲や霧となって立ち昇り、**まっすぐ大空に突き進み、**天空を突き抜けて、**真玄の境界に至るのだ。**この第一香は、今上皇帝が無限の長寿を享け、国土や国家を保ち、中国の繁栄が長く続くことを祈るもの。第二香は、国境[1]が静穏で、兵火が消え、天下各地の**民人が安心して盗賊もなく、戦争は止み、**穀物は豊作で養蚕の桑は繁茂し、老いも若きも、**どの家も満ち足りて農業を楽しむ**ことを祈るもの。第三香は、生死を分かっても情念が消えない二人について、**この僅かな香煙によって、冥界の霊魂を慰問し、**幽明境を隔てて愛情を通じ難い二人のために、**このたゆたう香煙を使って満面の笑み**が現れることを祈るもの。（小道士が花を差し出す介）散花でございます。（浄が散花する科）この花は、かの釈迦が弟子の迦葉に対して、**にっこり微笑んで花を拈んだ**ことにならうものでもなく、かの天女たちが維摩詰を訪ねて**花を散らして跳び回った**ほどのこともない。この花は、私が特に、香草の蘅蕪草や懐夢草を探して**仙界の御苑や花園を歩き回って摘み取ったもの。**これによって霊験あらたかに、**かの咲き残った花を再び相思樹に接いで開花させ、**道術を駆使して、**かの地に散った落花を必ず再び並頭蓮に花開かせる**ためのもの。（小道士が灯火を差し出す科）献灯でございます。（浄が灯火を捧げる科）この灯火は、赤々と燃えて**千年にわたって照らし、**きらきらと心に輝いて**人間の情愛を一途に伝える。**かの死者の霊魂に会える衡遥石を**懐中に秘め、**還形燭を**帳中に照らすのも**何ほどのことがあろうか。陛下はその**ひたむきな愛情をこの灯火に接続して祈り、**私はこの**ご神火でもって照らし、貴妃の無念の思いを払い除くことにしよう。**（小道士が盂を差し出す科）どうかわが師には聖水に呪文を。（浄が聖水を捧げる科）この水は、**曾て比目魚が泳ぎ、つがいの鴛鴦が浮かんだもの。**その昔は**魚が元気に泳ぐ水のように**有用であったものが、今日は**水と米のように**全く別物となってしまった。深い**情愛から成る河や海がやがては尽き、**同じく**儚い泡沫の夢幻の情縁が波立ちやすいことは、**それこそ数え切れないほどだ。**大海を見れば些細な水など取るに足りないであろうが、**私のこの**楊柳の枝から垂らした一滴の聖水で、冥界の楊貴妃を探し出してくれよう。**（小道士）供養の儀式は終わりました。して我が師には、どのような修法で貴妃の招魂をなさいますか？（浄）お前は私に**招魂用**

の衣服を用意し、貴妃の遺像を高く懸け、石段を掃き清め、幔幕を高く張り巡らすのだ。夜中十時から深夜二時になり、犬も吠えず、鳥もさわがず、木の葉も虫も音を立てず、露が光り、星月夜に風がさやぐ頃、しずしずと、なよなよと歩く佳人が出現する。そこで、**人の世の怨恨、あの世の未練**を証明できるという訳だ。

（内で音楽を演奏する科）（丑が祭文を捧げて登場）「天界からの青い鳥の使者が、一通の太上皇直筆の祭文を届けにゆく。」（中に入り、跪く科）私高力士が太上皇の命を受け、謹んで祭文をお届けに参りました。（小道士が祭文を受け取り、浄に差し出す科）（浄は丑に向かって手を組んで礼をする科）宮人様、しばらく法壇の外でお待ち下さいますよう。（丑が応じて退場）（浄）

【油葫蘆】私はこの**太上皇直筆で鳳紙に認められた祭文を、**ゆっくりと初めから**丁寧に広げて**拝見する。太上皇はひたすら、**生死の境を異にしたあの美人について、**今も変わりなく**固い愛情を保持している。**そのため私は**二人が再会できる**ようにするために、昔漢の武帝が**李夫人の霊魂を帳中に**招いたように、楊貴妃の霊魂を招き寄せたい。これはかの**西王母が宮殿の前に出現する**よりも素晴らしいことであり、今宵は、漢の**劉郎(2)の本願を成就させ、**二人が**積もる思いをゆっくりと語り明かせるようにしたいものだ。**

（祭器を動かす科）（浄が法術を行い、符書を焚いて念ずる科）この符書は、仙鶴や鸞鳥のように(3)仙界へ往来できる。これによって、功曹神の使者よ、急ぎ法壇に来たり参れ。（雑が符官に扮し、馬に乗って舞いながら登場、浄に見える科）仙師様、何のご用でしょう。（浄が符書を渡す科）面倒だが、この神符でもって、速やかに楊貴妃の霊魂をこの法壇まで連れてきてほしい。（雑が符書を受け取る科）かしこまりました。（雑が馬に乗り、舞台を一回りして退場）（浄）

【天下楽】見れば、**使者の黄巾が命を受けて行き、馬に鞭を振り上げ、遅滞なく使命を果たしている。**使者はきっと、**冥界の風に乗り、貴妃の霊魂をここに連れてくるであろう。**私の方は静かに、**この法壇で身をかがめて待つのみだが、**あちらの方はじりじりと急いて、**宮中で待ち焦がれているであろう。**おや、ずいぶん時間が経ったのに、どうして**使者の乗った仙雲も見えてこないのだ？**

こんなに待って、どうしてまだ帰ってこないのだ。おかしいぞ。

【那吒令】遥かに続く**山や河を前に、あてどない貴妃の霊魂を探し求める。**暗く沈んだ**月や星を前に、行方知れな

い貴妃の艶容を待ち続ける。冷たく静かな**石段の前には、貴妃の足音もしない。**それではもう一度神符を焚いてみよう。（神符を焚く科）私は効験のない**神符を燃やし続け、**無駄な手印を**空しく何度も結び、効き目のない呪文を**空しく唱える。

（雑が登場し、浄に見える科）仙師様に申し上げます。私め、人間界を隈無く楊貴妃の霊魂を探し求めましたが、探し出せませんでした。（浄）符官はしばらくお控えを。（雑）かしこまりました。（舞いながら退場）（浄が法壇から下りる科）小道士よ、高力士殿をお呼びいたせ。（小道士が内に向かって呼ぶ科）高力士様、お呼びでございます。（丑が登場）「水時計の音に長いこと朗報を待ちあぐねる。貴妃様の霊魂に会えたのだろうかと。」（会う科）仙師殿、楊貴妃様をお連れされたのか？（浄）今し方、符官が参りまして、貴妃様をお連れできないと申しております。（丑）ややっ！ならばどうすればよろしいのか。（浄）高力士殿、ここはまず陛下にご報告を。私めがこの法壇で自身の霊魂を飛ばし、天界だろうが黄泉だろうが、何としても貴妃様を探し出し、三日以内に必ず吉報を持って参ります。（丑）太上皇の貴妃様への思いは甚だ切なるものがあります。仙師殿には、どうか心して当たって下され。「まずは方士の報告を上皇に伝え、上皇の御心をお慰めしよう。」（退場）（内で細楽を演奏し、浄が羽織の道衣に着替える科）小道士よ、法壇にて心して控えておれ。私が座禅して、自分の霊魂を放出するほどに。（小道士）かしこまりました。（内で鐘や太鼓がそれぞれ二十四回鳴る。浄が法壇に上って正座し、歯を鳴らして目を閉じ、霊魂を放出する科をする）（小道士）ほら、我が師は霊魂を出すところです。では私は幔幕を下ろし、壇の下で控えていましょう。（壇上の幔幕を下ろす科をする。浄がひそかに退場）（小道士）「法壇に静かに鳴る鐘の音、大空にゆったり浮かぶ白い雲。」（共に退場）（末が道士の霊魂に扮し、法壇の後ろから回りながら登場）

【鵲踏枝】私は瞑目して、自分の**霊魂を出す。夢に仙界に遊ぶ**などと比べ物にもならない。私は**大空を踏みしだき、楊貴妃の霊魂を尋ねて行く。**私は楊通幽、上皇様から楊貴妃様の霊魂を探すようにとのお達しを受け、特に自分の霊魂を放出し、至る所探し求めています。さて、どこへ探しに行ったものか。（考える科）お、そうだ。まず、**天門に行って玉殿を軽々しく乱す**のをやめ、先に**冥界に行って黄泉を捜索する**ことにしよう。

ここはもう地獄の酆城の門。（内に向かう科）森羅殿の判官殿はおられるか？（判官が登場、小鬼がくっついて登場）

「私は鉄の算盤で人間の生前の善悪を細かく評点する。古今誰も輪廻の運命から逃れることはできない。」仙師様、何用があってここへ降臨されたのです？（末）私は特に大唐の貴妃楊玉環の霊魂を探しに参ったのです。

（判官）宮殿の妃や宮女は、全て冥府に冊子がございます。仙師よ、お坐りになり、お渡しする名簿をじっくり調べられよ。（末が坐る科、鬼が冊子を持ってきて、判官が末に冊子を渡す科）（末が冊子を調べる科）

【寄生草】これが、**宮女や歴代后妃の運命を記した冊子。**ここには、**戦闘服姿の褒姒が周朝を滅ぼし、牝雞**（呂后）**が鳴いた劉氏の漢朝が危うくなり、媚びへつらう女狐**[4]（則天武后）**が唐朝を改変した**ことが書かれている。おかしいぞ。ここには古今の**後宮女性の名が網羅されている**のに、どうして**楊太真の名前**が見当たらないのだ。

冥府に貴妃がいないとすれば、私はここをおいとまし、ひとつ天上を探してみよう。（末が退場するそぶり）（判官が跳びはねながら退場、鬼も後を追って退場）（旗を持った二人の仙女が、朝服を着て払子を手にした貼を導いて登場）「私は虹の旗を高く掲げて天宮に参内し、ゆったりと歩を進めて紅雲を踏みしめる。」私は天孫の織女、天帝に朝見するため、天門まで参りました。向こうから道士がやって来ますが、一体誰でしょう。（末が登場）

【尾篇】私の足が**地面を離れたかと思えば、**霊魂が飛翔し、**まっすぐ天上に至る。**（貼に見える科）これは織女様、私め楊通幽がお目通り致します。（貼）通幽殿、お楽に。ここへは何の用事で来たのですか？（末）私は大唐の太上皇の命を受け、楊玉環様の霊魂を探しに参りました。今し方、冥府を探しましたが見つからず、そこで特に天上まで探しに来ましたが、天上でも見つけ出せなかったので、すぐに出てきた次第です。貴妃様は、**嫦娥様と共に月の宮殿で恋しく思う**のでなければ、きっと**董双成について瑶池に姿を現す**のでしょうか。（貼）通幽殿、楊玉環の霊魂は、地下にもいなければ、天上にもいません。（末）やっ、ではまさか、**織女様の侍女梁玉清のように天帝の譴責に遭われたか、**或いは**霓裳舞を善くした貴妃**を尋ねても、**歌舞の名手で仙女になれなかった趙飛燕**を尋ねるように無駄なことなのか。

（貼）通幽殿、貴妃はここにいないのだから、あなたはそのことを上皇に復命すべきです。（末）織女様、復命するのは難しくありません。ただ私めは、

【後庭花滾】確証もないのに**金鑾殿で大言壮語し、**自分の霊魂を**大空に電光のように**飛ばし、**天上地下あまねく美**

女を探すことをまくし立て、無謀にも**虚空に佳人を探し出すこと**を請け合ったのです。（貼）誰がそんなにべらべらしゃべれと言いました？（末）このことは、私が**むやみやたらに尋ね回ったのではなく**、ただ、老上皇が**生死を超えて固く愛情を守り、生前の二人の誓いを決してお捨てにならない**ことに感動したが為です。（貼）玄宗は馬嵬で楊貴妃を死なしておいて、今さら何の愛情ですか。（末）織女様、お咎めになりませんよう。その当時、大変なごたごたの中、**天子は御車に乗って避難されましたが、**がやがやと**警護兵が騒ぎ出し、**憎々しくも**将兵が専横を極め、**めらめら燃え熾(さか)るように**暴虐の限りを尽くし、**ややがや騒いで**天子の命令に従わず、**残酷非情にも**貴妃様を冤死させました。**こうして、**仲睦まじい鴛鴦は生死の間に**バリバリと引き分けられ、**並頭の蓮は**カシャカシャと**むし り取られ、**やむなく、なよなよと**貴妃様の霊魂が四川の杜鵑を追って玄宗の後を追い、**空しくも、肉親を亡くしてオイオイと哭く**楚地の猿のように**悲哀の声をあげさせました。その果てしない恨みは**高く連なる華山の山並み**のようであり、その流れて止まない涙は**滄海を平らに填める**ほどです。（貼）今や貴妃と死別して久しく、歳月も流れたので、その愛情も薄れたことでしょう。（末）かの上皇様は、**貴妃様への愛情は何年も変わらず、その思いの深さは**言葉では言い尽くせません。上皇様は、終日**その艶容を心中に刻み、**毎日のように**そのお名前を口にしていらっしゃいます。剣閣の山亭に懸かる鈴の音**を耳にしたり、また**秋雨が枯れた梧桐に降り注ぐ**のに感じては、密かに**肺腑が煎られるように傷心され、**そぞろに**意気消沈して姿形もやつれられます。**貴妃様形見の**匂い袋**に向かっては**尽きない恨みの念**を起こされ、貴妃様形見の**錦の足袋**をかき抱いては**空しく涙を流され、**名残の**玉笛**を吹かれては**生前の怨みの残る一件を思い出され、**(5)名残の**琵琶**を弾かれては**夫婦の縁が断たれた**ことで貴妃様を偲ばれます。上皇様は、日中坐しては**寂寥にとらわれ、思いは千々に乱れ、**夜眠っても**うとうと、夢と現(うつつ)が倒錯したようです。**こうして、**ひたすら貴妃様を思い詰める心は変わらず、その篤い病がどうして癒えましょう。**上皇様は、**あの艶やかな花が二度と咲かない**のに心痛め、**貴妃様の霊魂に再び会える**のを願っておいでです。（貼）以前、七夕の夜に牽牛様が李三郎のために弁明したことがあり、今は楊通幽の説明を聴いたが、確かにこの情愛は真実であろう。何と人を深く感動させることでしょう。（末）私めは上皇様が**愛される意中の人との情縁が結ばれない**のを残念に思い、この**閑な道士の感情を揺さぶって**感動しました。そこで、**天界や地下への往復の蹤(あしあと)きも何のその、この辛苦を一身**

に引き受けることにし、ただちに**黄泉**の**国に踏み込み、天上世界を経巡りました。**ところが思わぬことに、貴妃様の姿は**風に飛ばされ糸が切れた凧のよう、**また**朝日に照らされる靄のようで、**さっぱり見当がつきません。広い**桃源郷を探し回っても一片の花びらも**見つけ出せず、寒々とした**巫山にも雲雨の神女の**雲気すらありません。万策尽きた私は**大空に手の伸ばしようもなく、雲の端に佇んで**いたずらに**眼を見開くばかり。**忙しく飛び回っても、**春風のように麗しいそのお顔**は幻にも現れず、**牡丹の名花のように艶やかなその姿**を造り出すこともできない。もし**楊貴妃様を探し出せないとなれば、**どうしてこの**楊通幽、一人で上皇のもとに帰れましょう。**織女様、お尋ねしますが、**貴妃様の霊魂は一体どこにいらっしゃるのですか？**

（貼）楊通幽、もしそなたがぜひ貴妃に会いたいのならば、私がその場所を示しますから、行って探してみなさい。（末が頭を地につけて礼をする科）織女様にお尋ねします。楊玉環様はどこにおられるのですか？

【青哥児】織女様が私のために、貴妃様の消息をお教え下さったことに感謝します。**どの花にも根があり、**どの**川にも源がございますように、**貴妃様の**行方はどちらなのか、**やはり**明言していただきたく存じます。**さすれば私は、**一時も留まらず、すぐさまそのお前に参ります。**（貼）通幽よ、そなたはこの世界の外に更に別世界があり、その別世界の山河の中に更に山河があるのを聞いたことはないか？（末）私の聞くところでは、**この世界の外の山河は、この世界とは別に廻り回っているそうですが、**ただ、**その別世界がどこにあるのか、そこへ渡るにはどうすればよいか**がよく分かりません。（貼）それは、東方の大海の外に一つの仙山があり、蓬莱山といいます。そなたはそこへ行けば、楊貴妃の消息が得られます。（末）織女様のお教えに感謝します。私は今まで、いたずらに**天上や地下を経巡って貴妃様を探したが、**それはいずれも**南北も分からない見当違いであった。**なるほど貴妃様は、**あの三千里の弱水に囲まれ、溟海の雲煙がたち上る、麟鳳洲の傍らにある蓬莱山の頂き**におられたのか。そこには、**仙界の薫草や霊芝の畑**(6)**があり、白鹿や黒猿が棲み、玉樹が風にさわさわとそよぎ、玉草が青々と茂っており、建物は碧い瓦と彫刻のある庇、月や雲に映える高館、楼閣がうねうねと延び、大門小門が連なっている。**そこならば、**俗塵から隔絶しており、まさに神仙が住むにふさわしい所です。**（貼）そうはいっても、そこは天の果て、海の彼方にあって、道のりは遥かに遠く、そなたは行くことができません。（末）ああ、織女様。上皇様は**無限の深い愛情で貴妃**

様を思い続けておられます。それを思えば、蓬莱山が遠いといっても**何ほどのことがありましょう。**

（貼）そのようであれば、そなたはお行きなさい。私は、又も人間界の愛情の糸が切れた無限の恨みの話を聞いたので、機織りの糸を紡ぐように、断ち切られた二人の情縁を結び直そうと思います。（仙女を連れて退場）（末）では私も天風に乗り、東海の彼方の仙山へ楊貴妃様を尋ねに行くとしよう。（風に乗って行く科）

【煞尾】私は、**漂い浮かぶ白雲を**ゆるやかに踏みしめ、**天風の勢いに**巧みに乗って飛び、**大海原を跨ぎ越えて行く。ふり返っても中国はどこにも見えず、うっすらと九つの点のような靄が霞んで見えるばかり。**そう言っているうちに、早くも**東海の果て、万丈の山の頂きに着いた。**ここは**三島や十洲のある仙界の別世界、**私はひたすら**清らかな御苑**を回って、**美しい宮殿**をめざす。そこで、必ずや**十分に時間を費やし、仙女の楊貴妃を探し出すことにしよう。**

私は楊貴妃の霊魂を求めて蒼天へ上って行く。　黄　滔
蓬莱山という不死の郷を誰が知っていよう？　趙　嘏
ここは人間世界を遠く離れた仙郷であり、　秦　系
五色の雲が遥か東海の中ほどに棚引いている。　韋　荘

注

（1）原文は「疆埸」、国境をいう。疆と彊、埸（エキ）と場は別字。
（2）「漢劉郎」は漢の武帝、劉徹。亡き李夫人の霊魂と再会した。『漢書』巻九十七上、李夫人伝参照。ここは亡き楊貴妃を偲ぶ玄宗に喩える。
（3）原文は「鶴翥鸞翔」。唐・韓愈「石鼓歌」に「鸞翔鳳翥衆仙下、珊瑚碧樹交枝柯」と。
（4）原文は「蛾眉狐媚」。唐・駱賓王の則天武后打倒の檄文「代李敬業伝檄天下文」に、「入門見嫉、蛾眉不肯譲人、掩袖工讒、狐媚偏能惑主」とある。

（5）貴妃がある時、寧王の玉笛を吹いたことで玄宗の怒りを買い、宮中を追い出された故事を指す。宋・楽史「開元天宝遺事」巻上参照。

（6）原文は「蕙圃芝田」。晋・王嘉『拾遺記』巻十「崑崙山」に、「下有芝田蕙圃」とある。

第四十七齣　補　恨

【正宮引子】【燕帰梁】（貼が織女に扮して登場）**玄宗の貴妃への愛情が深く、その霊魂を遍く求め、八方に手を尽くしているのは実に感動する。**それで私は、**蓬莱の仙島にいるその人にこのことを伝え、彼女をこの天宮に迎えようと思う。**以前、七夕に天河を渡った時、牽牛様が楊玉環と李三郎の長生殿での密誓の話をされ、私が彼ら二人の断たれた情縁を結び直すように求められました。今、ちょうど天門の外で俗界の道士楊通幽に遇ったところ、彼が言うには、上皇の貴妃への思いは一途そのもので、貴妃の霊魂を楊通幽に遍く探し求めさせたとか。この情愛は実に同情すべきです。そこで私は、楊通幽を貴妃の住む蓬莱山へ向かわせ、また侍女に命じて太真（貴妃）をここへ連れて来させ、彼女に事情を告げ知らせることにしました。さらにその心中を詳しく探るつもりですが、どうやら彼女がやって来たようです。（仙女が旦を連れて登場）

【錦堂春】聞けば、織女様の璇璣宮から詔命があり、雲中を急ぎ香車に乗って参内するようにとのこと。私は強いて愁いを抑えて天宮まで参りましたが、眉間に残る恨みの表情はなかなか隠せません。（仙女が到着を知らせ、旦が中に入って貼に会う介）織女様、楊玉環がお目通り致します。（貼）太真、拝礼はよいから、お坐りなさい。（旦が坐る介）今し方織女様のお召しを受けましたが、どのようなご下命でしょう？（貼）これまでそなたに尋ねたことはありませんでしたが、生前のそなたと唐の天子との情愛について、一度私に詳しく話して下さい。（旦）織女様、どうかお聞き下さい。

【正宮過曲】【普天楽】私は生前の冤罪と罪業とを悲しみ嘆きます。（悲しむ介）**そのことを言い起こせば、声がまず咽（むせ）ん**

でしまいます。二人はひたすら情愛を根源として、それに歓楽の苗や葉を茂らせました。陛下は私を慈しまれ、私は陛下をお慕いし、相愛の二人は一時も離れることがありませんでした。こうして、**二人は永遠に別れないと誓ったのに、**思いもかけないことに、**無惨にも月は落ち、花は折られ、二人の交情は跡形もなくなり、果てない恨みを抱きつつ、二人は生死を分かってしまったのです。**

【雁過声】【換頭】（貼）**お話を聞けば、二人の旧来の愛情は、蓮根が断ち切られても糸が長く続くように[1]、生前も死後も絶えることなく、かくも深く、かくも固く結ばれていたのですね。あなた達は二人ともこんなにも熱愛し、まして七夕の永遠の誓いも交わしたのに、どうして玄宗は突然鉄のように心が冷たくなり、非情にも馬嵬坡でそなたに背くことをしたのでしょう？**（旦が涙する介）

【傾杯序】【換頭】**ああ、お痛わしい！どうして陛下が急に薄情になどなられましょう！**思えば**あの日、陛下は馬嵬で変乱に遭われ、兵士の白刃が飛び交い、国家存亡の危機に瀕している折、大変な苦難の中で、どうして私ごときを守ることがありましょう？私は甘んじて死を選び、死んでも怨みはありませんし、陛下とは関わりの無いことです！**（哭く介）**結婚の誓いに陛下から賜った金釵と鈿盒のことを、どうして忘れることができましょう。**

（旦が金釵と鈿盒を取り出し、貼に見せる介）この金釵と鈿盒は、陛下と夫婦の契りを結んだ日に陛下から賜ったもので、私が馬嵬で遭難した時も身に付けておりました。蓬莱山へも身に帯びて来、朝な夕な大切にしております。私は陛下との生前の情縁を再び結びたく思いますが、遂げられるものでしょうか？（貼）

【玉芙蓉】そなたは、**永遠の愛を誓った初心を忘れず、記念の贈り物を捨てようとしませんでした。**太真よ、私が思うに、あなたを襲った馬嵬の一事は、**千年に一度の大変な惨事であり、むざむざと殺された恨みは比べようのないものです。**そのあなたが、**命を落としながら些かも憾むことなく、永別の焼香となった七夕の香を再び焚くように玄宗との情愛の再燃を懇望しつつ、この蓬莱宮で果てない愁いに閉ざされているとは、**思いもしませんでした。（旦に金釵と鈿盒を返す介）しかし、あなたは今や仙籍を有しているのですから、俗世の情縁は断つべきです。もしその情縁をずるずると引きずれば、**やがて、ここから問答無用で永遠に俗塵に落とされることになりましょう。**

（旦）私楊玉環は、

【小桃紅】神仙の位にはありますが、唐の宮殿を夢にも忘れられず、どうもがいてもこの思いを消すことができません。（起ち上がる介）織女様、もし陛下との情縁を再び繋ぐことが叶いますならば、どうか私を仙界から追放してもらいたく存じます。**もし私ども二人が再び夫婦として鴛鴦簿に記され、三生にわたって情縁が固く結ばれるのならば、**（跪く介）**再び**人間界に落とされるという**懲罰など、如何ほどのことがありましょう。**

（貼が助け起こす介）太真、お坐りなさい。私は長いことあなたの切れた情縁を再び繋ぐことを願っていましたが、馬嵬の事で、唐の玄宗帝の薄情と違約を恨みに思い、二人を再び夫婦にするのは難しいと思っていました。ところが、今し方道士の楊通幽が言うには、あなたが馬嵬で遭難した後も、唐の玄宗帝はあなたへの悲痛の思いが止まず、わざわざ楊通幽に天上地下世界のあらゆる所に入らせ、あなたの霊魂を探し求めさせた由。私は彼のこのような篤い愛情にうたれ、既に楊通幽を蓬莱山へ行かせました。ただ、あなたに少しでも無念の思いが残ってはいないかと思い、ここに呼んで尋ねた次第です。今や二人の愛情がぴったり合うことが分かりましたので、私は天庭に上奏して、あなた達二人がずっと天界の忉利天に住み、永遠に夫婦として暮らし、これまでの離別の恨みを補うことができるようにしたく思います。

【大石】【催拍】あちらの人間界では玄宗が貴妃を亡くして悲痛の思いに極まり、こちらの仙境では楊貴妃が玄宗を熱心に思っている。二人の**愛情がこんなにも深く、**二人の**愛情がこんなにも深いものであるので、**私は**双方の真情を天庭に上奏し、二人が離別の怨恨を補填し、永遠に円満であるようにしたいもの。**（旦が背を向けて涙する介）ただ、**それでも気がかりなのは、二人の罪業がまだ消えないために情縁が凍結し、二人が再会の機を失すること。**

（旦が貼の方に向き直る介）織女様のご配慮に感謝致します。私は上皇様にお会いできさえすれば、それで十分でございます。（貼）分かりました。聞けば、中秋節の夜にあなたが作った「霓裳羽衣」の新曲を月宮で演奏するそうなので、きっとあなたも招待されるでしょう。ちょうどこの夜は、唐の玄宗帝が昇天して仙人になる時でもあります。あなたは蓬莱宮に戻り、楊通幽にその時日に間に合うように上皇を案内させ、月宮で二人が再会できるようにしては如何ですか？（旦）ただ、月の宮殿はこのような私的な逢瀬がふさわしくないのではと恐れます。（貼）それはかまいません。私が前もって姮娥様に説明しておきます。二人が再会する時には、私

が奏上して天帝のお言葉をいただき、二人の情縁が永遠に続く証としたいと思います。（旦）織女様、本当にありがとうございます。ではこれで失礼します。（貼）

〔尾声〕二人が再会して団円となる中秋節になれば、きっとあなたの心は満ち足りるようになるでしょう。（旦）でも私のこんな**悲痛な気持ちは、**陛下にお会いしたときに**どのようにお話しすれば良いのでしょう。**

（旦）生前の事も死後の事も遥か遠くに離れてしまい、　天竺牧童
　この仙界で早くも厭になるほど長い日月が経った。　曹　唐
（貼）今日、私は貴妃のために昔年の恨みを除き、　薛　逢
　仙郷の月の宮殿の瓊樹の下で二人が再会できることを約束する。
　薛　能

注

（1）原文は「荷絲劈開未絶」。唐・孟郊「去婦」詩に「妾心藕中絲、雖断猶牽連」と。